青ネギと散弾銃

雛祭パペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青ネギと散弾銃

【Ｎコード】

Ｎ４０１０Ａ

【作者名】

雛祭パペ彦

【あらすじ】

ある日、気がつくと銀行強盗をしていた男の話。

（前書き）

コメディ小説

気がつくと、おれは銀行強盗だった。
しかし、本来のおれは八百屋なのである。
毎日、野菜や果物を売る職業に従事していたはずであり、お得意の主婦に「たまには青ネギの一本でもサービスしてやろうか、いやいや、そんなことをしていたらキリが無いから、やっぱりやめておこう」と葛藤するくらいがせいぜいの、おれは小心かつ人畜無害な男のはずなのだ。
それなのにどういうわけか、おれは青ネギではなく、ずっしりと重く兇暴な散弾銃を構えたまま、銀行のカウンター前に佇んでいた。
なぜ、八百屋であるはずのおれが、銀行強盗などしているの――アーッ！　よく見ると、おれの周りにいる全員が外人じゃないか。行員も客も、みんな金髪や金髪や金髪だった。
ということは、ここは外国の銀行で、おそらくもうすぐ駆けつけてくるであろう警官も外人で、たぶんおれは映画のワンシーンのごとく射殺される。
目の前にある光景があまりにも生々しいので、そもそも本当におれは八百屋なのだろうかと自分自身を疑った。もしかして、おれは、元々、銀行強盗なのではないか。犯罪行為という極限状況のなかで、追い詰められたおれはおれ自身を八百屋だと思い込むことにより、現実逃避を試みているのではないか。
――あれ？　でも掌の匂いを嗅ぐと、ぷーんと青ネギの匂いがするぞ。
それによく見ると、おれは前掛けをしていた。《八百源》という屋号が描かれた、黒地の前掛けを身に着けていた。ということは、やはり、おれは八百屋なのだ。
そして、たった今、気が付いたのだが、おれの肌の色は黒かった。それは日焼け程度のものではなく、明らかに遺伝的なものだった。

つまり、何を言いたいのかといえば、どうやら、おれは黒人だということだ。おれは、おれ自身のことを、てっきり日本人の八百屋だと思っていたが、どうも黒人の八百屋らしい。

アーッ！　今おれがいる場所が外国なら、銀行の中で散弾銃を構えている黒人の八百屋は・・・・・・アーッ！

おしまいだ。もう、おしまいだ。

改めて辺りを見渡すと、周りにいる人間は、ひとり残らず白人だったし、客の身なりもいい。つまり、ここは社会的に優遇されている人々が利用する金融機関であり、こんなところで黒人が強盗を働いたとなると、この社会では・・・・・・アーッ！

警官やＳＷＡＴにアーッ！

問答無用でアーッ！

おれの命はアーッ！

つい先程までは、散弾銃を投げ捨てれば、たとえ身に覚えのない懲役刑を喰らうことになっても、命まではとられないと思っていた。しかし、どうも事情は違ってきたようだ。

もし、黒人の八百屋たるおれが、唯一身を守るもの――つまり散弾銃を手放そうものなら、奴らはしめたとばかりに一斉にアーッ。

迫りくる警官やＳＷＡＴたちの暴力から身を護るためには、この散弾銃が手放せない。その一方で、黒人の八百屋であるおれが凶器を手にしていれば、奴らに犯人射殺の口実を与えることになる。結局どちらを選んだとしても、薬局、死を選択することになるわけで、死ぬのが嫌なおれは、どちらとも決めかねていた。

アーッ！　おれが散弾銃だと思っていたものが、いつのまにか青ネギに変わっていた。やはり、おれは八百屋だったのだ。

ということは、ということはですね、もしかすると、ひょっとすると、ここは銀行ではなく、我が家、すなわち《八百源》の店の軒先なのかもしれない、たぶんおれは店の軒先で佇んだまま白昼夢を見ているのだ、そしてその夢は今まさに醒めようとしているのだなどと自分に言い聞かせながら、もう一度、周囲を見渡すと、やはり

ここは外国の銀行で、おれは黒人だった。
となれば、おれが持っているものは青ネギなどではなく散弾銃なのかと手元に視線を戻せば、思ったとおり青ネギだった。うちの店では、３本１５８円で売っている。
まあそれはさておき、状況は悪化した。いくらなんでも青ネギでは身を護ることができない。いや待て。かえって、おれには好都合かもしれない。
なぜなら、俺がいくら黒人でも、青ネギを手に銀行を訪れたからといって、何か法に触れるとは思えないからだ。むしろ、青ネギであった方が、おれが黒人ではあるけれど、その一方で八百屋なのですよ普段は野菜を売っているのですよということを、お巡りさんたちに説明しやすいのではないか。
アーッ！　おいでなすった。とうとう銀行の周りを警官の奴らが包囲しはじめたぞ。
おれの手元にあるのは相も変わらず青ネギだった。しかし、散弾銃を持っているよりもかえって不審であると見なされた挙げ句、警官の奴らに撃ち殺される可能性が、おれの脳裏をかすめた。なぜなら、おれが黒人だからだ。
アーッ！　ハンドマイクで何か叫んでるけど、英語だから何言っているのかわけわからん。くそ。なぜだ。なぜ黒人の八百屋たるおれが、英語のリスニングができないのだろうか。
くそっ。あっ。よし、わかったぞ。そうだ。そうか、このおれの手元にある青ネギとも散弾銃ともつかないものが悪いのだ。
よし――食べよう。
おれは、おれの手元にあるものが青ネギであるうちに、残らず食べてしまうことにした。そうすれば、おれは善良な黒人の八百屋にしか見えないだろう。
アーッ！　でもちょっと待てよ。例えば、おれがこの青ネギを丸かじりした瞬間、それが再び散弾銃に変わって「ズドンッ」ということにならないとも限らないぞ。なんかそんな話を聞くか観るかし

たことがあるぞ、おれは。死にたくない、嫌ですよ死ぬのは。
でも、それでも一か八かに賭けるしか、今の状況を切り抜ける術はない――いや、おれは八百屋だから、そんな一とか八とかいう小さな数字には賭けられない。アーッ駄洒落だ。くだらない。
でも、やっぱりやるしかない。青ネギを残らず食うしかない。
よし、やるぞ――ぱくっ、ズドンッ、はい、おれの後頭部が吹き飛びましたー、と見せかけて、おれは間一髪で銃口を逸らすことに成功した。やっぱりね。ほらね。おれの思ったとおりだった。
アーッ！　ほっとしたのも束の間、銀行のウィンドウガラスの外を見れば、警官隊が群れをなして、全速力でもっておれの方へ駆け出していた。おまけに、その先頭にいる若い警官は、手斧を片手にウインドウガラスごとぶち破るつもりのようである。
もう、ここまで来れば、さすがのおれも覚悟を決めなければならないようだ。
おれは、おれの手元にある銃身の硬い感触を確かめると――それを放り投げてから、ものすごい勢いで、着ていた服を全部脱ぎ捨てた。つまり全裸になった。平たく言えば、スッポンポンになった。すなわち、陰部丸出しである。
せめて逃げればよいものを、なぜ、おれがこんな露出狂じみた暴挙に出たのかといえば――死ぬ前に、一度やってみたかったからである。一度でいいから、公衆の面前で素っ裸になりたかったのだ。
そんなわけで、図らずして、おれは夢を叶えることができたというわけだ。
アーッ！　そんなことを考えているあいだに、警官の一人が、丸腰でしかも全裸のおれを撃ちやがった。それを合図にしてアーッ！
次々と銃声がアーッ！　無数の弾丸がアーッ！　痛い痛い痛いやめろ痛い、死ぬ、死ぬぞ、死にそう、もうすぐ死んでしまうぞ、死んだ、死にました、おれは間違いなく死にましたよ。ちゃんと死にましたから、もう撃つのはやめなさい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4010a/

青ネギと散弾銃

2011年7月23日03時31分発行